

教化活動と儀礼

教化研究室

【目次】

- I、研究の主旨
- II、テーマ設定の意図
- III、葬儀儀礼
- IV、地域社会に展開する儀礼
- V、宗団儀礼
- VI、ネットワーキングとは何か

I、研究の主旨

総合研究の主旨は、院長によって智山伝法院発足にあたり述べられた「真言密教の現代化」にある。

この主旨に沿って当研究室では本年の総合研究にあたり、本宗の儀礼（行事）と教化活動を概観し、その現代化とは何かについて考察を試みた。

II、テーマ設定の意図

まず儀礼の意味を教化研究室の立場から仮説的であるが考えてみたいと思う。宗教儀礼に神仏が道場してくるのは自明である。その神仏と人間のコミュニケーションの形態の様式化が儀礼である。そして、その儀礼全体が及ぼす人間への影響が教化である。このような視点に立って、今年度の総合研究のテーマである「儀礼」を考えたとき、その研究の方向が、本宗において執行される儀礼の全体像を捕らえ、現代において儀礼がどのように執行され、どのように檀信徒の生活に影響しているのかを検証し、今後の展開を予想し、その具体的なビジョンを得ることに絞られるのは理解されよう。このような考えに基づき、本研究では本宗の寺院で現在展開されている儀礼の中でも、(1) 葬儀儀礼 (2) 地域において展

開される儀礼(3)宗派儀礼の三点について考察してみようと思う。

また、現代の教化活動に必要と思われる手法上の問題として、ネットワーキングの可能性について考えてみたいと思う。

III、葬儀儀礼

現代は專業化、分業化の時代であるといわれる。人生の終末においても例外ではない。医師は医師の領分において患者を治療し、亡くなれば僧侶と葬儀社の登場となる。それぞれが何の連関もなくも事は足りる。それは社会的了解事項である。葬儀社が真言宗の事をなにも知らなくても、困る事はないのである。また、医師が患者の信仰について考慮するという事は殆ど稀である。最近、輸血を拒否する信仰を持った宗教の人々の事が社会を賑せ、中学卒業以上の年齢に達した人の場合は、本人の意志を尊重するむねの医師会のコメントが発表され、物議を醸したが、体制は医療の世界は依然医療の世界であり、宗教の介在する余地はほとんどない。宗教が人間にとってその一生を通じての指針であるという前提が真なるものであればこれは矛盾であろう。また、終末医療に限らず、臓器移植の問題など医療と生命に関する議論

が世上行なわれているが、中央医療審議会に、宗教者が参画している事実はない。

以上のような現状認識に立った場合、葬儀儀礼がはたして宗教儀礼なのかどうかというおかしな疑問さえ起こってくる。実際、釈尊は出家者が葬儀を執行する事を禁じたし、日本における南都の仏教には葬儀儀礼を持たない宗派も存在する。しかし、現代の日本仏教がその多くの宗教活動を葬儀の場に比重を置いているのは紛れもない事実であり、本宗においても即身成仏の立場から葬儀儀礼を構成し、檀信徒教化の重要な機会としている。ただし、葬式仏教という名の示すとおり、葬儀だけが、あるいは葬儀のみに偏って宗教活動が展開されている傾向は、世界的に見ても異常である。歴史的に、あるいは経営的にそうならざるを得ない現実があるとは言え、変えていく必要がある。少なくとも葬儀專業化を批判する言葉として「葬式仏教」と言う言葉が一般に使われている以上、その批判の裏側にある「非葬式仏教」とは何かを考えていくべきであると考ええる。

「葬式仏教」という言葉の裏側には、そのことにしか対応してくれないという檀信徒の不満がある。葬儀は人生の最終儀礼であるから、そのことにしか対応してくれない

いという声には、それ以前のことについて、宗教的なフォローを求める心が働いていると見るべきだろう。全国的に見ても、本当の信仰とはどういうものかを求める声は多い。そして、このことに親切に対応する寺院は緩やかではあるが増加している。しかし、そのような寺院でもやはり葬儀及び年回法要が活動の中心である事は変わらない。これは檀信徒の寺院への必要性の問題でもあるから、寺院の側からすればその機会をとらえて、教化活動を展開するのが有効な方途である事は理解できる。

では、葬儀全体のシステムに何か問題はないのだろうか。『現代密教』第六号にて、教化研究室では「教化活動と習俗」という視点からこの問題に取り組んだが、ここでは葬儀の変化が問題となった。地方においても、都市部においてもこのことは顕著である。そして、その方向は簡素化、簡略化の方向にある。これは葬儀儀礼に関わらず、他の儀礼についても言える。これは地方においては過疎化、都市部においては核家族化にその多くの原因がありそうである。特に都市部においてその変化は大きい。これは隣組などの従来の人間関係の崩壊によるだろう。東京などでは戦前は葬儀は隣組によって運営される習慣があったが、ほぼこの習慣はなくなり、変わって

葬儀社による取り仕切りが行なわれるようになった。この傾向はほぼ全国的になりつつある。葬儀社は企業であるから当然拡大生産的に、能率を希求する。時間に縛られた葬儀儀礼の誕生である。勢い僧侶もシステムティックに動かざるを得なくなり、遺族との語らいの時間さえ無くなるような状態となりがちである。「葬式仏教」という名の示すとおり、僧侶は葬儀の時に突然のようにやって来て、システム通りのお経をあげて、また風のように帰っていく存在に見えてしまう。そういう状態を嫌う僧侶と、葬儀社のちよつとしたトラブルは頻発する。

このような現状を生んだ原因の多くは、導師たる僧侶の側の姿勢にも多く認めなければならないことながら、日本人の人生の終末期における宗教との関わり方に問題があるように思われる。日本人の多くはその終末を病院において迎える。医師は治療に全力を尽くすが、身体の問題が医療のうえで非常に大きいことが認められるようになったが、これは本人の身体をよく知っていることもさることながら、日頃からの心の交流も見逃せない。また、医師の力の及ばなくなった末期癌患者などを看病する所では明らかに僧侶の宗教活動を求めている。この医

療と仏教会のネットワークづくりは、いまだ全体的な動行とは言い難いが、各地で少しずつすすんでいる。今後この活動が進行すれば日本人の終末期における過ごし方は随分違ったものになるだろう。また、葬儀における檀信徒と僧侶の人間関係のあり方も違ったものになるはずである。

葬儀社と僧侶の問題も、その多くの原因は相互のコミュニケーションの不足にあると思われる。これは経験的に感じる事ができる。よくお互いを知っている僧侶と葬儀社の場合、トラブルめいたことはほとんど起こらないし、逆のケースでは相互不信により簡単な連絡の伝達さえぎくしゃくしたものになりがちである。地域の葬儀社と寺院のネットワークづくりが、葬儀社が葬儀における必要不可欠のものになっていく以上必要であろう。

もっとも重要なのは、外ならぬ檀信徒と僧侶の人間関係である。言うまでもなく、日常的なレベルでの相互の交流、教化活動が不可欠である。しかし、現代の、特に住職の多忙を考えた時、住職一人にその任を求めるのは困難である。そこでは寺庭婦人、副住職、家族の協力が必要なのは当然のことながら、従来の名誉職的な総代世話人制度の再検討が要せられる。週休二日制の普及など

によって、ボランティア活動が増加している世相を鑑み、住職の肩代わりができるほどの教化活動のできる世話人の育成、教化が必要であろう。本願寺系では総本山においてこの種の研修が盛んに行なわれている。これに当たるものとして本派では、檀信徒連絡協議会が設定されて久しいが全国的なネットワークとはいまだ成りえていない。

葬儀儀礼をめぐる問題は、現代の寺院にとって最も重要であろう。しかし、その問題の根本は突き詰める所、葬儀をめぐる人間関係にあるようである。大きく変化してきた戦後の日本の現状にあった寺院の組織作りと、他の関係諸団体とのネットワーク作りが、その問題の解決に向けた急務であると考えられる。

IV、地域社会に展開する伝統儀礼

地域社会に展開する伝統儀礼の代表的なものには、「盂蘭盆会」「花祭り」などがある。これらの行事は一寺院で営まれることも多いが、地域仏教会、地域の同宗派寺院の合同主催で催される場合も少なくない。盂蘭盆会の送り火に行われる精霊流し、花祭りの稚児行列などでは、スケールメリットを生かした方が、より効果的な教化活動を実現できるからだろう。

ここでは一寺院で、広く地域社会に呼びかけながら行われている奥羽教区遍照院の「火渡り」行事と、地域仏教会が共同して行おうとしている八王子市仏教団の「灯笼流し」を紹介しながら、地域に展開する儀礼(行事)の今後を考察してみようと思う。

奥羽教区 工藤智教師の場合を紹介しよう。(『現代密教』第五、六号参照)

工藤師のお寺遍照院では古くから「火渡り」の行事が行われていたが、規模が小さく、地域的にも余り知られた存在ではなかった。寺院にとっても経済的負担が大きく、工藤師も任職を継いだ時点では継続か、否かで悩んでいた。しかし、寺院の伝統行事として長年継続してきたものを、代が替わったからといって無くすわけには行かなかった。師は昭和六〇年ころから、積極的な「火渡り」行事の展開に努め始めた。まず、「火渡り」だけからは寂しいので、これに「柴燈護摩」を付加し、平成三年からは「四国八十八か所お砂踏み」をつけたした。更に、檀家の積極的な参加を要請し、それまで任職一人で企画運営してきたものを、準備委員会を設け、委員長に檀家の中から広く地域社会に顔のきく五〇代の行動力のある人材を据えた。委員会の平均年齢は三十五才であ

る。地域への伝達には新聞広告が採用され、一檀家につき千円の広告協賛金を募った。更に、法話の会などを催し、行事の密教的意義について教化に勤めた。結果、参加者百人前後であった頃に比べると、近年では二百五十人前後となり、大館市を代表する行事ともなった。

工藤師のこれらの活動の中で注目すべきは多々あるが、これからの伝統行事の展開に不可欠なのは、準備委員会、あるいは実行委員会のあり方ではなからうか。これは施餓鬼会のようなどの寺院でも行われる行事についても言えることである。任職一人や、長老に傾く傾向のある総代世話人会では、発想の視野も狭くなりがちで、檀家の関心も拡大しにくいのではなからうか。工藤師は言う。「檀家はお寺で年回や葬儀をやる御客様ではなく、寺院運営と進行の参画者である」と。

次に、平成六年が戦後四十九年目の五十回忌に当たるころから、世界平和祈念と戦争被害者追悼供養を企画して、進行しつつある東京都八王子市の仏教団の場合を紹介しようと思う。

これは八王子仏教団(百二十七か寺)理事長の発案によって企画された。事業の意味合いからして、市民的行事にならないものかと、他団体に呼びかけたところ、故

湯川秀樹博士等の提唱によって発足した世界平和連邦、子供育成会、青年会議所、観光協会、川下り実行委員会などが共同主催してくれることになった。ちなみに川下り実行委員会とは、「灯籠流し」の翌日に行われる八王子市を流れる浅川を舞台に繰り広げられる、カヌーや手作り筏のレースを主催する団体のことである。このイベントはすでに今年で四回目を迎えて、その前日には前夜祭が行われていた。これとネットワークできたことが、今回のこの事業の大きな展開につながったことは間違いない。

伝統行事には日本人の懐かしい記憶を呼び起こすものが少なくない。しかし、それらの行事も、やはり地方においては過疎の問題で実行者たる若者の減少や、都市部における横の人間関係の希薄化によって、行事自体の存続が困難になってきている。寺院の閉鎖的な傾向を打破して、広く社会のいろいろな組織とネットワークすることによって、新たな展開が開けそうである。

V、宗団儀礼

宗団儀礼の代表的なものとして後七日御修法がある。空海自らが始めたこの儀礼は、明治四年太政官布告により勅会が廃止されたが、雲照らの嘆願により十六年に

は東寺灌頂院で再興された。御衣加持を主とし、明治四十五年からは加持された御衣をその年の代表本山の菅長が東上し、奉還することとなる。修法は真言宗再興の大法であり秘法である。

ところで教化宗団を標榜する智山派の教化活動と御修法とはどのように関連するのだろうか。宗派を代表する高僧でなければ、御修法は一般論として、自分に関係したり、教化活動として考えられるものではないだろう。

しかし、住職が教化活動を実践するには、自分の活動理念あるいは将来像がある。その将来像を実現するために種々の形態で活動が展開されるわけである。したがって、教化活動の動機あるいは理念に焦点を当てると、御修法は考察しなければならない問題として浮かんでくる。

例えば「つくしあいの手帳（緑本）」では、信条に「この身がみ仏様とひとつの命であるゆるぎない安心を確立しよう」とある。私たちは一人一人それぞれに「み仏様と一つのいのち」という、あるいは「大いなるいのちをみずからの生きる力とし生かされて生きる喜びを深めよう」とある。生きる喜びを深めていくことが目指されている。

このような「つくしあい」の考え方は、宗教的な立場だけでなく、日常の倫理的な問題まで視野が広がっている。それを敷衍すれば、基本的人権の問題につながるものがある。また、檀信徒には平等を説く場合もあるだろう。

基本的人権の問題、中でも同和問題は、伝統教団に課せられた問題である。同和問題に関する問題はすでに本庁に提出されており、「三代聖霊をはじめ……」は問題の箇所として指摘されている。

また、現代の天皇制における問題もある。本堂の本尊の前には、今上天皇という位牌がまつられてある寺院もあるに違いない。

また釈尊の言葉に、自分の命が大事なら他の命も大事にせよ、殺生するな、詐称させるなという（ダンマパダ）。いのちは、自分という存在、家族、財産、地位、名誉などに広がる。中には自己顕示欲という一面もあるが、この中には、自分という存在は、今日的には基本的人権が裏付けとなっていることを意味するといえるだろう。

はるかに隔たったとは言え、基本的人権にそぐわない行事が恒例化していることは問題とすべきだろう。

弘法大師の時代には、玉体安穩、鎮護国家も宗教的な世界像を目指す上で必要だったろう。しかし、鎮護国家を今日的に、国民福祉、社会福祉の問題と言い換えても、それらは行政で経済的・社会的な政策として行われている。

時代や社会によって活動形態が変えることはあり得ることである。

つまり、御修法を考察することは、より広い視野から我々の基本的な姿勢を問い直すことになるだろう。

ひいて言えば、総本山智積院と宗団、宗団と教区、教区と個々の寺院といった智山派の組織を構成するそれぞれの間のネットワークに緊密性を欠くために、このような問題が生じてしまう遠因があるのではないだろうか。

VI、ネットワークキングとは何か

金子郁容著『ネットワークキングへの招待』中公新書によれば、ネットワークキングとは、「複数の『もの』がある程度持続性のある何らかの関係を基礎にある種のまとまりを形成しているものでもなろうか。ネットワークにINGをつけたネットワークキングという言葉は一般にはネットワークが形成される過程を示すものである。ただし、ネットワークキングは単にネットワークの形成過程

を意味するだけでなく、その背後にある個と個の関係、個と全体の関係、組織の作り方などに関する思想やコンセプトを示す言葉である」と言うように説明される。

この説明に従って、本宗の組織を論ずれば、「複数のもの」とは、僧侶と檀信徒であり「ある程度持続性のある何らかの関係」とは真言宗智山派に属するという関係であり、ある種のまとまりとは、真言宗智山派そのものである。ではこのネットワークを形成している個と個の関係、つまり、僧侶と檀信徒との関係、僧侶と檀信徒と宗派の関係、その組織の作り方及びあり方はどうであろう。つまり、本宗のネットワークはどのように機能しているのだろうか。

歴史的に見れば、檀家制度に基盤をおく現在の制度は江戸時代の徳川政権によって形成されたと見るべきだろう。しかし、幕藩体制の崩壊と、第二次世界大戦後の社会変革によって、その内容は大きく変化した事は周知のごとくである。このスペースではその変化について詳細に見ていく事はできないが、戦後五〇年を経ようとする現代において、寺院及び檀信徒を取り巻く環境が大きく変化しようとしている事実は見逃すことができない。家そのものに関係の基盤を置いてきた檀家制度は、核家族

化と個人主義の定着によって見直しを迫られている。

本研究の主題である儀礼についても、先述したとおりにある。

このような現状から言える事は、基本的な本宗におけるネットワークの見直しではないだろうか。金子氏は、これからの組織作りについて、参加型のネットワークを提唱する。儀礼を支えるものは、それに参加する人々の人間関係である。自主的な参加こそが、儀礼の意義をより深める。

先述したように、儀礼とそれを支える組織の、個々の寺院の現状をよく観察し、より積極的なネットワークに変えていく事が今後の教化活動の大きな課題と考える。

参考資料

『現代密教』第六号

『ネットワークキングへの招待』

金子郁容著中公新書